

旧華頂宮邸の洋館に圧倒されて!

●湘南浦高会主催「鎌倉散策」に参加 その3

12月6日(土)の「湘南浦高会主催の「2025年紅葉

の鎌倉散策」の続きです。「報國寺」を後にして「宅間ヶ谷」を歩いて5分程度の「旧華頂宮邸」に向かいます。洋館の華麗さに圧倒されましたが、鎌倉市の維持管理とのこと大変でしょうね。ご紹介してまいりましょう。

◇ ◇

◆宅間ヶ谷(たくまがやつ): 鎌倉幕府の絵師、宅間為行がこの地に住んでいたためこの名がついたとされる。

父為久は頼朝の命により京都から下向して勝長寿院の壁画を描いた。

◆旧華頂宮邸(きゅうかちょうのみやてい): 木造2階建て(一部3階)、敷地4,500㎡、延床面積577㎡、外壁木骨モルタル一部レンガ貼り、屋根銅板葺き・切妻。旧華頂宮邸は昭和4年春、華頂博信侯爵邸として建てられました。華頂夫妻が住まれたのは数年のみでその後たびたび所有者は代わり、平成8年には鎌倉市が取得しました。建築的特徴は戦前の洋風住宅建築を代表するものでハーフティンバー様式(下層が石造りかレンガ造り、上層が木造建築)です。北の玄関側正面は壁面模様もあってピクチャレスク(絵画的)、南側庭園側ファサードは幾何学的なフランス式庭園と相まって端正で厳然としています。南側の日本家屋は昭和45年以降に当日の所有者実業家の松崎貞次郎が茶室「無為庵」と門を上大崎から移築したものです。国登録有形文化財、鎌倉市景観重要建築物。



門から北側ファサード



北側ファサード



南側庭園からファサードを見る



3班の皆さんと記念撮影



◆華頂宮家: 華頂宮家は伏見宮の分家にあたり、初代博經(ひろつね)親王は嘉永5年(1852)知恩院の門跡になり、明治元年の勅命により復飾買(世俗間に戻る)として知恩院の山号「華頂山」に因んで華頂宮の称を賜りました。

◆華の橋と石仏: 橋のたもとに3体の石仏があります。右端の坐像は阿弥陀如来だと思われます。材質は柔らかな鎌倉石。頭の後ろには円形の頭光、肉身部には体の線にそって身光を刻んでいる。目を閉じて、口元を緩め、腹の前で組んだ手の形は瞑想している姿です。中央の石仏は舟形の光背、厳しさが感じられる姿と表情は長谷寺様式です。左では蓮華の華、右手には錫杖を持っているのが特徴。一番左である石仏は二手の馬頭観音像で、頭に白馬印と呼ばれる馬印をつけ、合掌した手は人差し指を立て他の指を曲げて背と背を合わせた馬頭印を結んでいます。この地区は、鎌倉時代に坂東一番札所の杉本寺と二番札所の岩殿寺を結ぶ巡礼道でした。また近年まで鎌倉石の石切が盛んな所で石運びに働いた馬の供養も行われました。

